

## フランスの英語教育

広島大学大学院 柳 善 和

### I 概 観

#### (1) 地理的背景

フランスはヨーロッパ西部に位置し、面積 547,026 km<sup>2</sup>、人口 5,371 万人 (1980 年) の国で、これまで世界史の舞台で重要な役割を演じてきた。現在でも先進資本主義国の 1 つとして着実に経済的發展を続けており、その独自の政治路線は常に世界の注目するところとなっている。

#### (2) 言語的背景

フランスを語るときにフランス語を忘れることはできない。1539 年フランソワ一世によるヴェレール・コトレの勅令の中で、「フランス国内の公的生活では王の言語のみが国家の言語である」とされ、また 1635 年に設立されたアカデミー・フランゼーズは現在に至るまで、フランス最高の知識人 40 人を終身委員とし、「正しいフランス語」の純粋さと美しさを守り育てるといった目的のもとに活動している。さらにフランス語は Antoine de Rivarol の「Ce qui n'est pas clair n'est pas français」の言葉を待つまでもなく、その明快さ、論理性によって国際語の地位を保ち続けている。

しかしながら、フランス国内に存在する、ブルトン語、バスク語などの少数言語を学校教育の中いかに取り入れるか、また英語等の外国語がフランス語に与えている問題も見逃すことはできないだろう。

#### (3) 教育的背景

フランスの教育体系は、ヨーロッパにおける統一学校運動の考えに立ち、従来の複線型から単線型の学校教育制度への改革が進められてきた。特に戦後、一連のランジュヴァン改革案 (1947)、ベルトワン改革 (1959)、アビ改革 (1975) を通して、小学校 5 年—コレージュ (前期中等教育) 4 年—リセ (後期中等教育) 3 年という学校教育体系が完成した。なお、現在、義務教育は 6 歳から 16 歳までの 10 年間と定められている。

フランスの教育の特色は、①知育重視、②公教育の世俗性、③中央集権制と教育の画一性という 3 つにまとめられる。①の知育重視の特色は、進級が小学校からすでに年齢制でなく課程制であり、留年率も 10% 前後とかなり高いことがうかがわれる。③の点に関しては、授業科目の種類や教育内容が細かく規定されており、地方による差はほとんどないとされる。

### II 教育内容及び方法

#### (1) 英語の位置

ETIC (1972) によると、フランスにおける英語の役割は、英国におけるフランス語の役割とはほぼ同じであり、研究職等にあるものには、外国語の論文を読む力程度は必要であろうが、伝達的手段としては、旅行者によっても使われることはまれであるという。

#### (2) 教育課程

外国語教育は中等教育段階から始められ、第 1 外国語は中等教育全体を通して必修であり、

生徒の進路によって第2, 第3外国語, またギリシア語, ラテン語が課される。次の表は外国語の選択状況及び英国, 西ドイツとの比較を示している。

The comparative pattern of language teaching in  
England, France, and Germany  
(rounded percentages)

	England	France	Germany
First modern language	68 (Fr)	59 (Eng)	67 (Eng)
Second modern language	19 (Ge)	20 (Ge)	32 (Fr)
Third modern language	6 (Sp)	16 (Sp)	1 (Ru)
Other modern languages	7 (It, Ru)	6 (It, Ru)	Trace (Sp, It)
Total	± 100	± 100	± 100

(④: 15)

外国語の授業には, 第1外国語から第2, 第3外国語まで大体週3時間があてられる。

### (3) 教科書・授業内容

この項では, 中等教育の前期・後期で使用され, 全国で80%近くの学校で採用されているとされる *Classique Hachette* 社のシリーズをもとにして考察を加えてゆきたい。

#### ① 前期中等教育

まず文法事項についてみると, 最初の2年間で主要な文法事項はほとんど出てくる。特に1年目に, 時制では, 現在進行形, 未来形, 過去形, 現在完了形などがみられ, さらに, why, because, 関係代名詞などもみられる。

語いについては, 1年間で大体600~700語が新語として出されているが, 第1巻の660語中610語が, 第2巻で再使用されるなど知識の強化が図られている(⑩: 69)。吉田(1975)は, 第1巻から第3巻までに使用されている名詞について, 日本の中学校の英語教科書と比較している。それによると, 日本の教科書では, 名詞の頻度数が低く, また, フランスの教科書は日本の教科書に比べて日常生活に密着した語いを多く載せているという。例えば plate, jug, ringなどはフランスの教科書では頻度数が高いが, この研究の対象となった日本の教科書には載せられていない。

また題材については, イギリスの生活を中心にしたものが, ほとんどであり, 英語を使って自国のことを伝えていくという姿勢はみられない。

#### ② 後期中等教育

後期中等教育で使用される教科書はイギリスの文学作品を主体にしたものが多く, 載せられている作家は Shakespeare や Bacon から現代作家に至るまで多様であるが, 主に, 18世紀から20世紀の作品で構成されている。日本の高等学校の教科書に採られている文学作品は, 筋立てを重視し, 細かい描写が省いてある場合が多く, また学校文法に合わせて原文を書きかえてある場合もみられる。これに対して, フランスの教科書では原作の一部をそのまま使っている場合がほとんどで, 難解な語句には英語で説明が加えられ, さらに本文に対する内容設問, 本文に関連した essay が課されている。イギリスの生活, 習慣, 社会制度, 政治, 経済等についても, それぞれ関連した文学作品と共に英語で説明が加えられている。

ここで注意せねばならないのは, フランスでは教科書に何をを用い, どのようにそれを教えるかは全く教師の裁量に委ねられていることである。それだけに具体的な授業内容はこれらの教科書類から推測するしかないが, 前期中等教育で, 生活言語にも充分配慮し, 英語力がバランスよくついた後に, 文学作品に重点を置いたより高度な学習を課しているといえるだ

ろう。

### (3) バカロレア

バカロレアはフランスの長期中等普通教育の修了及び国立大学への入学を認定する国家学位である。このバカロレアを取得すると自分の希望する大学へ入学する権利を得たことになる。バカロレアには専攻によっていろいろな種類があるが、全体を通して受験者は該当年齢の2割、合格率は6～7割である。

英語をはじめ外国語の場合は、筆記試験と口述試験があり、各々専攻によっていずれか一方、あるいは両方を受験する。筆記試験は30行程度の文章が出され、内容設問、一部の仏訳が課される。口述試験では、受験者が在学中に習った教材の中から試験官が1つを選び、それについて外国語で討論したり、一部を仏訳させたりする。この場合、評価は試験官の裁量で行うことになっている。

バカロレアはフランスの中等教育に大きな影響力を持っており、特にリセではバカロレア取得のための教育が行われているといってもよい。それだけに、外国語の試験に口述試験が取り入れられていることは注目される。

### (4) 教員養成

フランスでは幼稚園、小学校の教員は同資格、同待遇で、師範学校で計画的に養成されている。しかし、中等教育の教員に対しては3種類の資格があり、①コレージュ一般教育教職適性証書、②中等教育教職適性証書、③アグレガシオン、と呼ばれる。後者になるほど取得が難しく、地位も高いとされるが、それは給与、待遇面で明確に反映される。一般にフランスでは教員は生徒の生活指導等の面にはあまり関わらないが、教師の専門領域の知識が増えれば、より上級の学年が教えられるという考えがあるようである。

## III 考 察

以上をもとにしてフランスと日本の英語教育を比較し、若干の考察を加えてみたい。

日本とフランスの英語教育に共通しているのは、①両国とも先進資本主義国であること、②英語は外国語であり日常生活には必要ないこと、③独自の文化的基盤を持っていること、の3点であろう。逆にフランスの英語教育が日本のそれと異なる点を挙げると、①地理的に英語圏の国に近く、古くから文化的に影響し合ってきた、②言語が似ており、学習が容易である、という2点であろう。

しかしながら、共通点として、英語は日常生活に必要なと言っても、フランス語とは同語族であるし、またフランスが独自の文化基盤を持つと言っても、ヨーロッパ文化の1つであり、イギリスとは歴史的に交流があったわけである。全体の印象としては、地理的、言語的条件に恵まれているフランスの方が、英語教育は成功しているようにみえる。

フランス人はフランス語への言語忠節から、外国語を自分から話したがるまいといわれる。しかし、それを理由として、外国語を学ぶ意欲をもっていないとは言えないし、学んでも書き言葉だけということはない。やはり彼らは、歴史的経験や地理的環境から外国語の学習が重要なことを理解しているのであろう。

〔参考文献〕

- ① 麻生 誠・潮木守一（編）（1978）『ヨーロッパ・アメリカ・日本の教育風土』 有斐閣新書。
- ② ドベス・ミアラレ（編）（1972, 和訳1977）『世界の教育』 白水社。
- ③ ETIC (1972) “English Language Teaching Profile, France,”
- ④ Halls, H. D. (1970) *Foreign Language and Education in Western Europe*. George G. Harrap & Co Ltd.
- ⑤ Léon, Antoine (1967, 和訳1969) 『フランス教育史』 文庫クセジュ。
- ⑥ 太田 朗（1964）「諸外国における英語教育」 現代英語教育講座2 『英語教授法』 研究社。
- ⑦ 沖原 豊（編）（1981）『世界の学校』 有信堂。
- ⑧ 田中克彦（1981）『ことばと国家』 岩波新書。
- ⑨ 平塚益徳（監修）（1980）『世界教育事典（第2版）』 ぎょうせい。
- ⑩ 広島大学教育学部英語教育研究室（1974）「フランスの英語教育——英語教科書を通して——」 『英語教育研究』 №17。
- ⑪ 増田純男（編）（1978）『言語戦争』 大修館書店。
- ⑫ 吉田一衛（1975）「フランスにおける英語教科書の特徴」 『現代英語教育』 Vol. 12, No5, 14 - 16